
アビリティー・ウェイク

なごみーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリテイル・ウエイク

【Nコード】

N9873Z

【作者名】

なごみーぬ

【あらすじ】

人々の生活の中に突如としてあらわれた”能力者”という存在・・・
ただの高校生として過ごしてきた主人公、”バレット・ルージット”は
ひょんなことから能力者同士の過酷な戦いへと巻き込まれていく・・・
様々な能力者や組織と交わる中、バレットが貫き続けるものとは・・・

・？

自身のFC2ブログの方でも記事としてアップしてあります。無
断転載ではありませんのでご了承ください

1話 ウィクトルナンバー（前書き）

ありがちな”能力バトル学園モノ”という題材で書いてみました

キャラクターの区別をつけやすいため、口調などは大げさにしているつもりです

小説を書き始めて日も浅いので厳しい意見やご感想など大歓迎です

1話 ウィクトルナンバー

この世界はここ数年でガラリと変わった

何故か

簡単に言うと、能力という奴が世間一般に知れわたるようになったからだ

要は、怪光線や電撃を撃ち放ったり、高速移動やテレポートできたり…

そういう人間が世界各地で増えているようだ

能力を持つ人間は問答無用で優等生…成功者として称えられる存在なのだ

正直、無能力者からしたら羨ましいなんてもんじゃない

…まあ、正直こればかりは運なので仕方がない…よな…

…

くミティオライト高等学校く

時は4月の中旬

生徒たちは入学式も終え新しい校舎、学級にも多少は慣れを覚えつつある頃だろう

そんな中、休み時間を無意義に机に突っ伏して過ごしている

棘々した髪型の男子生徒が1人

名を”バレット・ルージット”

バレット「はあ…」

机に散乱したプリントや教科書に眠そうな視線を送りながらため息をつく

そんなバレットに嬉しそうに近づく女の子が1人

金髪の長髪をなびかせている

名を”エリス・サジテール”

エリス「こらあバレット！お昼休みなんだから外行こ！外」

ふてくされた表情でエリスを睨みつけるバレット

バレット「そんな時間は無えよ、見るよこのレポートの数」

エリス「ただの宿題じゃん！家でやればいいんじゃないの？」

バレット「今日中」

エリス「ええ…ん、でもそもそもバレットが授業サボったり居眠りしたりするせいじゃないの？」

バレット「うるせーな…良いよなあエリスみたいな能力者様は、宿題はおるか授業すらサボっても単位やら進学には全く無問題」

エリス「私はちゃんと勉強してるよお！」

バレット「今日は午前の授業オールサボりだったじゃねえか」

その言葉に苦笑いしたエリス、だがすぐに自慢気な表情に変わった

エリス「ふふん 今日はこの高校の”ウイクトルナンバー”の第4位を負かしてやったんだよ」

バレット「ウイクトルナンバー？なんだよそれ」

エリス「この高校には三十人近くの能力者が居るらしいのよね！そしてその中で最も強い7人がウイクトルナンバーと呼ばれるらしい
まあ私が4位に勝ったから私が3位！」

バレット「ふーん…」

エリス「という訳で私はこれから1位をぶっ飛ばしてきます！」

そう言うとエリスはくるつと一回転して教室の出口に駆けていった

エリス「あ！私が高校最強ベストワンになった暁には飯を奢ってあげる！！だからこの教室で首を長くして待ってなさい」

バレット「ああ、忘れてなければな」

力なく手を降るバレットに満面の笑みを向け足早に教室から立ち去るエリス

バレット「ていつか…お前4位だろ…まあいいけど」

…

放課後 体育館裏

エリス「ちゃんと果たし状は読んでくれたみたいね！」

????「はア…時代劇の見すぎじゃねえのか？」

エリス「靴箱に女の子からの手紙なんてドキツとしたんじゃないの？第1位さん？」

????「つつか…とりまお前は死にたいってゆう解釈でいいのかわ？」

エリス「ふふつ、第4位ですらあんなヌルイ高校のベストワンなんて底が知れてると思うけど？」

????「4位？4位…あー、なんだっけなあ…アクアパラソルだからライオディアスだったか…」

エリス「私もどんな能力者が忘れちゃった、弱すぎて

あなたの能力も覚えてられるか怪しいなあ」

????「てかよあ…お前ガチで頭悪いなあ

知ってるかあ？この高校のベスト3のメンバーは二年間ずっと不動なんだぜ？」

第4位以下なんざ周一ペースで入れ代わってんだよ…

もう分かるよなあ？4位以下と3位以上じゃあ…圧倒的な実力の差があるんだよ…クヒヒヒ」

まるで悪魔のような笑いを浮かべる第1位に若干であるが恐怖を覚えた…

だがそれ以上にエリスは自分が一番強いという自信を持っていた

エリス「ずいぶん喋る口数の多い1位さんね、4位を軽く捻られて焦ってるの？」

???「あ？クヒツ いいねえその溢れる自信良いよ良いね全然オツケー

そのプライド…スタスタにしてやりたいわあ…じゃあそろそろ開戦つてことであ…」

すると1位は片足を何かをしようとしたが、それと同時にエリスは片腕を前に出しそこから閃光弾のようなものを撃ちはなった

これは彼女の

大気中の空気を圧縮して利用できる能力
空気を圧縮し高質量の弾丸を放つたのだ
名を”本命空気（エアロバスター）”

が、確実に第1位へと向かっていったはずの弾丸は右に大きく反れ、近くにあった花壇をぶち壊した

エリス「やるじゃない！」

間髪入れずにエリスは細かい弾丸を百発ほど放射状に撃ち放つ

攻撃を反らされるなど今まで戦ってきた念力や重量操作の能力者で慣れっこだ

「クヒヒヒ…」

…まるで全ての弾丸が第1位を恐れるようにそれぞれがバラバラに反れていった

鳴り響く爆発音…地面や壁、近くにあった倉庫などはボコボコになったが

第1位は傷ひとつ付いていない

エリス「っ…!？」

「???」「さあ…て…俺は一体何をしたのかなア？」

全く気づけていないア水面にご褒美でえす」

第1位は足元の石を踏み砕いた

その瞬間、エリスに激痛が走った

腹部に先程の石の破片が全て刺さっていた

エリスと第1位の距離は15メートルはある。まぐれで破片が全部

こつちに飛んできた…とは考えにくい

これは…奴の能力

エリス「念動…力…?」

血が滲む腹部を押さえながら相手の能力の本質を見極めようと試みる

「???」「クヒヒヒ…つか、全然ちげえよ

てかそれじゃ超能力者ってか?そんなダセエ代物じゃあねえ

よ俺のちからは」

すると第1位は突然エリスの目の前まで迫ってきた

エリス「ひっ…！」

驚くエリスの表情を見て一層笑顔を濃くした第1位は
エリスの腕を掴み上げた

???「クヒヒヒやべえマジで細い腕えやべーよ

ってか無謀な勝負にあっさり負けた敗者にはどんなご褒美を
あげようかなあ？」

エリス「や…やめ…ッ…」

〈1A教室〉

バレット「はあ…もうレポートは無理そうだな…」

積みりに積もったレポートを絶望的な表情で見つめ肩を落とすバ
レット

ふと外野の雑談が聞こえてきた

A「おい聞いたかよ、能力者同士が体育館裏でバトってたってよお」

B「おう、ビックリしたぜ…しかも片方は高校最強だとよ…」

C「どうやら不動のまま相手を打ち負かしたとの事らしいですよ
今頃第1位にいたぶられてるんじゃないですかね」

バレット「…」ガタ

すこしばかり心配になったので例の体育館裏とやらに行ってみる事にした

おぼつかない足取りで「勉強どうしよう」「腹減ったな」などとブツブツ言いつつ歩いていると体育館裏に着いた

とりあえず人が2人居るのが見えた

エリスが血を流して倒れているの…銀髪の黒服男子…

バレット「何してんだよ」

気付くと口が開きそう言っていた

???「何って…とりま…」褒美タイムってところかなあ？」

バレット「何やってくれてんだ…お前…」

気付くと拳を握り奴を睨み付けていた

エリスはバレットの幼なじみ、いつも無駄ににこやかに振る舞ってそれが今、苦悶の表情で地に伏せている

それがなかなかどうして許せはしないようだ

???「つか、お前はどうゆう能力で俺を全然楽しませてくれんのかなあ？」

バレット「無えよ！能力なんて！」

「は？？」

バレット「むしろ欲しいくらいだ！！」

「はあ……ブフツ……なんだよそりゃあ……ククアホかマジで

とりま……マジにひ弱な虫一匹があ……恐ろしい恐ろしい鷹に頭
摘ままれにきたって事でいいんだよなあ」

バレット「さあな、俺にはお前はヒヨコに見えるがな！」

2話 デュアルブート

体育館裏

放課後もとくに過ぎ夜が訪れ始めていた

???「っーかよお…お前マジに頭悪いなあ…てか、自暴自棄にでもなっっちゃってんのかあ？」

脳無しの鼠に俺の名を教えてあげましょう、ありがたいだろ？

俺の名は”デフラグ・ブルーバック”つかお前はこの先一生この名前に怯えて過ごす事になるんだよなあ…可愛そうだわ…」

バレット「名前なんて聞いてねえ！エリスに何をした！」

デフラグ「あ？…あーいや、大丈夫だって！ただ石ころを刺してやっただけさあ

ま…俺の事を一生忘れないように深く切っただけあるがな…
クヒヒヒ」

バレット「っざけんな！この野郎！」

デフラグ「ふざけてんのはてめえだろ…無能力者が最強能力者にケンカ売るなんざギャグにしても笑えねえぞ」

バレット「うっせえ！」バツ

バレットはデフラグに向かって飛びかかった

デフラグ「クヒヒヒ…馬鹿だなあ…」地面から離れて直進する”なんて、マジに”軌道に乗って俺に向かってる”状態じゃねえか」

確かにバレットは確実にデフラグに向かう軌道に乗っていた
しかしながら全く違う方向の壁に追突していた

バレット「ぐはっ！」

左肩をぶつけ反動で地面に叩きつけられた

バレット「お前…何しやがった…」

デフラグ「ああ？ ああ、ま、雑魚には教えても支障無えか

俺の能力は”二色配線くデュアルブーツ” 性質としては”軌道変化能力”って言った方が分かりやすいんだが

俺のデュアルブーツは少しばかり異質な物も関わっているらしいからまあ…本質とは違うわなあ」

バレット「軌道変化…？」

デフラグ「てか…体で理解すれば良いんじゃないのか！？」ドゴオ

疑問の表情を持つバレットに間髪いれず

横にあった体育館倉庫の窓を蹴り割るデフラグ

すると割れたガラスは全てバレットの方へ向かった

バレット「なっ…！」

すかさず飛び退き避ける

…だが避けきれず足に二発ほど食らう

バレット「くっ…要は念力ってわけかよ！ややこしい説明すんな！」

デフラグ「てか念力じゃねーっつてんだろマジで頭大丈夫かお前

俺が放つ攻撃は全てお前へ向かう軌道に向かう

だがお前の攻撃は全て俺へ向かう軌道から追い出されて

当たらねえ…はア…簡単じゃねえか…」

バレット「ぐっ…なら…！！」ダッ

バレットはデフラグに向かって走る

拳を高く振り上げながら…そう、肉弾戦に持ち込む作戦だ

デフラグ「はっはあ！無能力者は接近戦しかできねえわな！」ガキ
ン

更にもう一枚のガラスを割りバレットに向かわせる

バレット「食らうか…！」

素早く横に跳びかわす

すかさずデフラグの頬に一撃、パンチを浴びせる

デフラグ「ぶはっ！」

バレット「その攻撃は”俺の居る場所”に向かってくるだけだろ！
直進しかできないなら避けちまえばなんの意味も無え！
！」

デフラグ「ツぎけんア！！」

殴られた驚きと怒りでぶち切れたデフラグは
懐からナイフと数本のボルトを取りだし投げ
即座にバレットへの軌道に乗せた

バレット「おま…！！うぐっ！」

奇襲とも言えるその攻撃には左手でナイフだけでも庇う事しか出来
なかった

数本のボルトも刺さり左手は完全に負傷した

デフラグ「ツ…！！」

はツ…てかしかしなんだアお前、能力攻撃に耐性知識あ
りすぎだろ

無能力者のくせによお」

バレット「こちらら能力者様には恐れ敬いっぱなしなんだよ！

何度欲しいと思っただか…でも俺には知識を付ける事しか
出来ない

だが…お前みたいな能力者には恐れねえ！後輩の女の子
1人いたぶってニヤついて何が最強だよ！！」

デフラグ「つか…なんですかあそのつまんねー理由はア

とりまお前今自分がどうゆう状況下に居るのか理解でき
てんのか？」

すると上着をバツと開き
中から無数のボルトとナイフが姿を見せた

狼狽^{うづた}えるバレットの後ろで呻くような声が聞こえた
怪我で起き上がれない体で、涙と泣き顔でくしゃくしゃな顔で彼女は
は呟く

エリス「逃げて…バレット…私の為に戦わないでよう…」

エリスとバレットは幼稚園からの幼なじみだった
しかし体も弱く、自分勝手にケンカ腰で男勝りなエリスは
色々な所でいじめを受けたり、絡まれたりしていた
そんなとき、いつも助けてくれたのはバレットただ1人だった
ケンカで額から血を流していても、どこを怪我しても、”お前が無
事なら良かった”その台詞と笑顔を何度聞いたことか

エリスにとってそれはコンプレックスになっていた
私をもっと強ければ、バレットは怪我をしないで済む
私がバレットに辛い思いをさせてる、不幸にしている
そんなとき、彼女に能力が宿った
強さを手に入れた、私は最強だ。バレットに守って貰わなくていい
んだ
彼女のコンプレックスは消えた。

はずだった

バレット「お前を見捨てて逃げる…？出来るわけないだろ！！俺が
必ず守ってやる！」

デフラグ「俺が操れるのは単純に”お前を狙う軌道”だけじゃねえ！

”どの方向から”狙うかも精密操作できるんだよ！

クヒヒヒハハア！！全方位から狙われたら流石に避けられねえよなあ！！」

バレット「舐めんな！そんな程度で…」

デフラグ「おいおい…てか照準向いてんのはお前だけじゃねえんだぞ
後ろの馬鹿女もだ！ハハハハア！！」

バレット「なツ…てめえ！！」

やめて、そんな目で見ないで

バレットの目、怖いよ…まるで…自分を犠牲にしても私を…
嫌だ…私の為に戦わないで…

エリス「バレットお！！逃げてよ！！私なんか守らないでよ！！」

バレット「何いつてんだ！！全く聞こえねーぞ！！そんな言葉！！」

デフラグ「いいねえ！！やべーよ！マジで！つか大切なもの！！守
ってみせるよ！！あゝあ！？」

どうやって守るのが見せてくれよ偽善者さんよオ！

究極の二沢だぜ！？テメーの命か！！女の命か！！どっ
ち守るんだよ！！」

バレット「どっちもだ！！」

デフラグ「はア！？」

バレット「大切な人なら死んでも守りたいさ！！でもな！

死ぬのは間違いないんだ！死んでしまったら大切な人を泣かせてしまう！悲しませてしまう！不幸にしてしまう！！

俺は生きてこいつを守る！！」

エリス「バレット…やだ…嫌…やめてよお…」

デフラグ「……………カッコつけてんじゃねえええ！！」

デフラグは無数のボルトを宙に放った

そして同時にデュアルブートを発動

バレットとエリスを囲むようにボルトとナイフが飛んでいく

そしてエリスの前に立ち塞がり一歩も動かないバレットへと直進していく…

その瞬間

爆発が起きた

砂煙がデフラグに襲ってくる

デフラグ「ああ！？…つか…なんだよこりゃ…ふざけてんのかマジで…！！」

砂煙が晴れ前方に目をやると炎が上がっていた
中にバレットが居る

バレット自身から出るその炎は、まるで盾のようになっていた
ボルトなど全て溶け落ちて消滅していた

デフラグ「は、なるほどなあ、ラッキーだなお前

今この瞬間、能力発現ってわけかよ！」

バレット「これが俺の…」

すると炎はデフラグに向かい直進する

デフラグ「でもなあ！！ラッキーはこれまでだ！炎の軌道が操れないなんて誰が言ったんだコラア！」

すかさずデュアルブート発動

時速120km 重量96.7kg 距離にして半径10m以内で

あれば操作可能なのだ

炎など簡単に操れるはずなのだ

だがデフラグは気付くと空を見ていた

デフラグ「は…？」

先程の火炎に吹き飛ばされていたのだ
軌道が…変えられない

デフラグ「なツ…んだよ…つか…意味わかんねえぞ…」

発動係数は…元素の乱数調整…こいつの炎には精神的な
感性が加わってんのか？

ダメだ全然理解できねえ！！なんなんだよ！！お前の炎

はよオ！！」

バレット「うるせえ知るか…そんなの！！」ダッ

拳に炎を宿らせデフラグに向かい走り出す
デフラグはもはや一切武器を持っていない
立ち竦すくむしかできない

バレット「うおおおおお！！」

強烈なパンチが真つ正面からデフラグの顔面に当たった
何mか吹き飛び、デフラグの意識は途絶えた

…

数日後

1 A 教室

あの時俺に宿った炎は何故デュアルブートを撃ち破ったのか
それは全く分からないが、エリスは無事だった
あのあとすぐに先生が救急車を呼んでくれたおかげで大事には至ら
なかった

だが…エリスは能力を使えなくなった

能力についての様々な部分は現代の科学では説明されておらず
医師によると”精神的なショック”が原因だそうだ

エリスは心を閉ざし、家族以外とは口を利かなくなった

…勿論、俺とも

これからしばらくは入院して精神面をケアしていくそうだし
しばらくは、会えないだろう

バレット「はあ…」

落ち込みなのか気疲れなのか分からないため息をつく彼にクラスメイトが話しかけてくる

ビオランテ「どうしたんだいバレット、その哀しい表情は」

アニーケイ「仕方ないね…エリスが居なくなつたもんね…歪みなく頑張つてよ」

キヨシ「ですね…まあ…バレットさんがため息つくのは昔からですが」

バレット「…ああ」

もうこいつらと、エリスも一緒に馬鹿みたいに騒いで遊ぶ事はないんだろうか…

俺はあの日…エリスを守っていたつもりだったのに
苦しめてしまってたのか？

そう考えてるうちに、ふと涙が一粒だけ落ちた

明日からまた頑張ろう

3話 クラスメイト

雲ひとつない晴天で

5月 春特有のぼかぼか陽気で遊びに出るには持ってこいな休日だ
そんな日に、バレット・ルージットもまたクラスメイトと遊ぶ為待ち合わせしていた

バレット「いい天気だなあ」

などとこれ以上ないほど当たり障りのないセリフを吐き
ふと腕時計を見ると昼の一時丁度だった

すると向こうから女の子の音がする

「おまたせです」

バレット「おう」

彼女はバレットのクラスメイトであり友人である
名前”キヨシ・サンカズヤ”

黒いショートヘアで瞳の大きい美人さんだ
中学の一年生からの友達だ

いつもは休日最低でも3人で出かけるのだが
エリスが欠けてしまった為二人きりなのだ

キヨシ「ごめんなさい、待ちました？」

バレット「あ、いや、今来たところ」

キヨシ「ピオランテくんも誘ったんですけど忙しくてこれないです
うです」

そつちにも連絡来てましたよね？」

バレット「あ…いや、ごめん俺携帯持ってない」

意外な返答に驚きを隠せないキヨシ

キヨシ「ええ！携帯なんて今どき彼女も友達も居ないぼつちさんで
すら皆持ってますよ！？」

バレット「なんでそんなやつが携帯持つんだよ…」

連絡だったら家に固定電話あるから取れるし」

キヨシ「外出中でも細かい連絡の取り合いとか…とにかく！無いと
不便ですよ！

今からでも契約してきましょうよ！携帯！！」

バレット「…めんどくさい」

キヨシ「知ってますか？」善は急げ”ですよ！バレットさんが携帯
持ってないなんて嫌ですよ！」

バレットの右手を引つ張り

眉間にしわを寄せ大きな瞳でバレットを見つめながら
唇を尖らせ無理やり”携帯シヨップ”なるものへ連れていった

…

「携帯シヨップ」

店員「はい、では契約完了致しました

ではこちら月額のプランで…通話料金の…」

あつという間に契約は終わり

そして他様々なお得的な要素満載なサービスプランへの勧誘が始まった

何故だかキヨシはしたり顔で嬉しそうだ

キヨシ「何気に私と同じ機種ですねバレットさんっ」

バレット「何気に…って、お前が無理やり…」

まいいか、腹減ったし飯でも食べに行くかぁ」ガタッ

とりあえず朝から何も食べていないので

店員の勧誘を軽くあしらってさっさと立ち上がる

しかし携帯みたいな小さい機械は全然触った事がないので早く慣れる為に携帯をいじりつつ店を出た

バレット「えと…電話…つってもまだ登録してないか」

キヨシ「じゃ私がアドレスと番号送るので携帯を無線待機モードに

…」

バレット「いや分からんしなにそれ…」

バレットがキヨシに質問しようとした所で
急に背後から男にぶつかられた
はずみで宙に舞った携帯をなんとかキャッチしホッと一息ついた所
で辺りを見渡す

「邪魔だつてんだよ！ボウズ！！」

さっきぶつかった男は覆面とサングラス
両手でカバンを抱えて息を荒くして向こうに走っていった

その直後、後ろから少女の声で

「返してえ！！」

声が出た方を振り替えると
恐らくあのカバンの持ち主であろう少女が涙目で腰を崩して座り込
んでいた

キヨシ「ひったくりですよ！」

バレット「待て！！」

間髪入れず走ってひったくりを追いかけた
後ろからタツクルをかましひったくりはバランスを崩し電柱に激突
する

カバンは地面に落ちた

ひったくり「ぐッ…てめえ…ただで済むと…うぐっ…」

鼻を強く打ったひつたくりはうずくまって苦しんでいる

キヨシ「良かったあ…バレットさん怪我はしてませんか？」

バレット「おう、全くあぶねーな…危うく携帯壊れるところだったぞ

女の子「あ…あの！ありがとうございます！！

な、なんてお礼を、お礼をしたらいいか！

ああの私メイカって言います！」

長めの茶髪をなびかせる少しあどけない口調の彼女
名を”メイカ・ワットスク”

バレット「いや、大丈夫だって

ほら、これお前のだろ？」

カバンを拾いメイカに渡すバレット

メイカ「あ、ありがとうございます！本当に助かりました！

その…あの！三万でいいですか！？」

バレット「は！？」

そう言うと財布から三万円を取りだしバレットに渡そうとしてきた
お礼を期待したわけではないし、周りからは淀よどんだ視線が飛んでき
て戸惑う

バレット「いや、いらぬから！お金は大切にしろって！」

そんなやりとりをしている間に二人の背後から声がした

キヨシ「きゃっ!?!」

先ほどのひったくりがキヨシを捕まえ

ナイフを首もとにあてがっていた

ひったくり「オラお前ら動くんじゃねーってんだよ!

女あ!コイツの命がおしけりゃそのカバンを寄越しな

ってんだ!」

バレット「お前っ…そんなに女の子のカバンに興味があんのか!」

メイカ「う、え、無理です!渡せませんから!」ダッ

メイカはカバンを持ってあっさり逃げた

その瞬間、彼女のカバンからカードのような物が地面に落ちた

ひったくり「なっ…このやろう!」

慌てるひったくりの肩を誰かがポンと叩く

金髪ショートヘアでのっぺりした顔つきの青年だ

???「おいおいタクリ…アレが奴らに渡りそうとはいえ…

こんな真っ昼間街道ド真ん中で騒ぎ起こしちゃケツから食われちまうぜ?」

タクリ「TKCさん…でも…」

どうやらひったくりの名前はタクリ

謎の男はTKCというらしい

TKC「まつ、女のケツ追いかけるなんざ”コイツ”に任せりゃいいじゃねえか

行け！ジャント！！」

するとTKCの体から紫色の蒸気が出て

やがておぞましい顔をした巨人へと姿を変えた

周りに居た一般人たちはその姿を見るや一目散に逃げていく

バレット「なっ…お前能力者だったのか！何をする気だ！」

タクリ「ちっ…お前らはもういいってんだよ、オラ彼女返してやつからさっさと帰れ」

キヨシ「わっ…」

すると先ほどのひったくりのタクリはキヨシをあっさり返した手荒く放った為、バレットの胸に飛び込む形になった

バレット「おっと、大丈夫かキヨシ？」

キヨシ「あ…はい！それより…なんですかあの巨人！？」

バレット「知らねえ…でもあの女の子を狙ってるってなら放っておけねえな」

TKC「命令はあの女の追跡と取り抑え、さあ行けジャン…ん！？」
ジャント「シユプシャパシエロスシャシャ」

ふとTKCが紫の巨人”ジャント”の方を見ると
頭部が焼けて苦しんでいる
バレット「おい！もういいだろ！あの女の子になんか恨みでもあ
んのか！」

TKC「おうおうなんだあ誰かと思えばバレットくんじゃないか、
コイツにケツを握られたくなきゃさっさと去るんだな」

バレット「なんで俺の名前を…！？」

TKC「ありゃ、随分寂しい事言っなあお前は」

バレット「(…？でもコイツの顔…どこかで見たような…どこでだ
っけ…)」

タクリ「ちっ…TKCさん、コイツは俺が引き受けますんで、あの
女頼みます」

TKC「おう、頼んだぜ！」

この場をタクリに任せ、TKCは巨人と共にメイカを追いかけた
バレットが止めようとするがタクリの手から放たれた何かに邪魔を
された

バレット「氷…！？」

タクリ「俺の能力は”氷狩(アイスシヨテラー)”

空気中の水分を瞬間凍結させ利用できるってんだよ

お前の炎と対になるような力って訳だな…」

バレット「キョシ！離れてろ！」

キヨシ「は、はい！」

キヨシを戦いに巻き込まないように退かせたところでタクリが繰り出してきた

空気中の水分を凍らせ手に余るほどの大きさの氷の塊を三個ほど作りそれをバレットへ向けて飛ばす

バレット「くっ！」

すかさず避け火球を撃ち放つ

しかしタクリは予め左手に氷で作った盾で身を守った

いくら氷が炎で溶ける。とは言っても一瞬激突した程度では消滅する事はない

バレット「お前らはその能力を女の子1人追いかけて回すのに使うのかよ！」

タクリ「お前、わかってんのか、俺は”ウィクトルナンバー”元4位の

タクリ・クビクワレだぞ！」

バレット「知るか！そんな名前！！ただか4位程度で自慢してくんな！！！」

そう言うとバレットは先ほどより大きい火球を撃ち放った
しかしまたしても氷の盾で防御された
更にタクリは右手に氷で作った大剣を握った

タクリ「こつちにも事情があんだよ、大人しく退いてはくれねーか
命を捨てたくはないだろ？」

バレット「お前、気付いてないようだから教えてやるよ」

タクリ「！」

バレット「お前の力つてのは空気中の水分を使って武器や攻撃に利用するんだろ

…ならこの短時間でその盾やら大剣なんか作つたら”空
気中の湿気”つて奴も沢山奪つてんじゃないのか」

タクリ「な…！」

その瞬間、バレットの周りを巨大な炎が包んだ
湿気が無くなり空気が乾燥し、火力が著しく上昇したのだ
あまりの熱気にタクリの盾や剣は水に変わり消滅した

バレット「はあああ…！」

まるでドラゴンのような巨大な炎が拳から撃ち出され
タクリは吹き飛ばされ壁に激突し気を失った

バレット「ふう…よし、あのTKCとか言う奴を追いかけないと！」

キヨシ「あ…待ってくださいバレットさん！」

これ、彼女がさつき落とした物なんですけど…」

キヨシが見せてきたのはカードのような物で
メイカの顔写真が貼ってあり、学生証のようにも見えたが丸つきり

違う物だった

それには”god ear ゴッドイヤー”という彼女が所属している事務所、機関の名前が書いてあり

様々なコードアドレスや数字が羅列されている中

”人権level 0,25”と書かれていた

その文字にただならぬ気配を感じ、バレットの口角は下がり冷や汗をかいていた

キヨシ「なんか…危なさそうですよ…」

あの女の子とは関わらない方がいいんじゃないか…」

バレット「いや…彼女が何者であっても、現に今巨人に襲われかけてる

俺は助ける、メイカを」

キヨシ「あはは、バレットさんならそう言うと思ってました。私も付いて行っていいですか？」

バレット「ヤバイと思ったらすぐ逃げろよ」

そう言うと2人はメイカが走って行った方向へ同じく走った
ビル街脇の、一通りの少ない細道に2人の影は消えた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873z/>

アビリティー・ウェイク

2011年12月31日16時52分発行